

脳ドック・もの忘れドックコース 一覧

●=必須
△=オプション

検 査 項 目		標準コース	MRコース	もの忘れドック
		月・水～金曜日	第 2/4 土曜日	火曜日
基本項目	身体計測【身長・体重・血圧・BMI】	●	●	●
	頭部MRI/MRA	●	●	●
	頸動脈超音波検査	●		
	血圧脈波検査	●		
	心電図	●		
	眼底検査	●		
	胸部一般撮影	●		
	血液検査	●	●	●
	末梢血【白血球・赤血球・血色素量・ヘマトクリット・血小板数】	●		
	末梢血液像【好中球・桿状核球・分葉核球・好塩基球・好酸球・単球・リンパ球】	●		
	肝機能【AST(GOT)・ALT(GPT)・ALP・γ-GTP・総蛋白】	●	●	
	脂質【総コレステロール・HDLコレステロール・LDLコレステロール・中性脂肪】	●	●	●
	脂質【脂蛋白B・脂蛋白(a)・脂蛋白分画】	●		
	危険因子【CRP・血中総ビリルビン・インスリン】	●		
	その他【血糖・HbA1C・クレアチン・尿素窒素・尿酸】	●	●	●
オプション	尿検査	●		
	心理検査			●
	診察（医師説明）	●		●
	結果報告書	●	●	●
	血液検査	△		
	A アディポネクチン	△		
	スモールデンスLDLコレステロール	△		
	A+ IL-6	△		
	TNF-α	△		
	B LOX-INDEX	△		
	心臓ドック	△		
	単純CT検査	△		
	経胸壁心臓超音波検査	△		

脳ドック検査内容の説明

●肥満度（BMI）

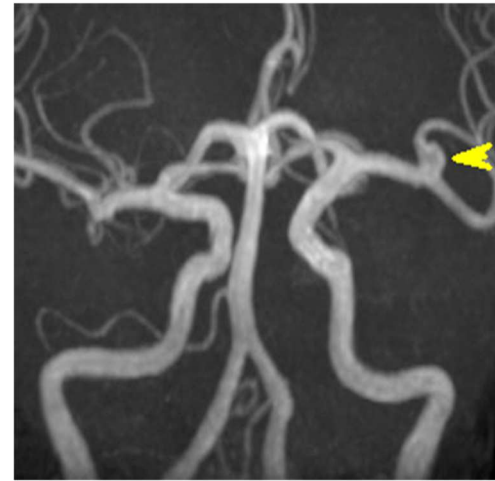
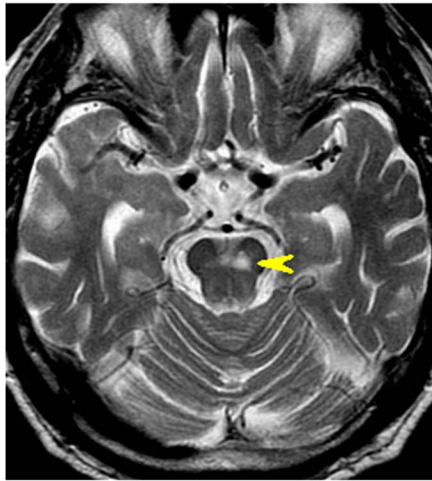
$BMI = \text{体重 (kg)} \div \{\text{身長 (m)} \times \text{身長 (m)}\}$

理想体重 = 身長 (m) × 身長 (m) × 22.0 の計算式で算出します。

BMI が 18.6 以上 25.0 未満を標準とし、25.0 以上を肥満と判定しています。

●MR 検査

磁気を利用した検査で臓器の形を細かくみます。縦・横・斜めなど自由な角度で輪切りにし、コンピューターで画像を合成します。脳ドックでは、脳と脳動脈を検査します。



●頸動脈超音波検査

脳ドック検査では、頸動脈の血管壁の内膜と中膜の厚さや、動脈硬化に基づく隆起性の病変（プラークと呼びます）の有無を調べ、動脈硬化の程度を判定します。

●血圧脈波検査

動脈硬化の程度を測る検査です。ABI（足関節／上腕血圧比）の値が 0.9 以下のときは下肢の動脈に狭窄または閉塞が疑われます。

●眼底カメラ

脳ドック検査では、網膜血管の動脈硬化の程度や出血の有無などを検査します。

●末梢血検査

・白血球

白血球は体内に侵入した細菌やウイルスに対抗し、体を守る働きをします。

・赤血球、ヘマトクリット

貧血の有無や程度を明らかにするもので、高値の場合、血液が流れにくく、血管がつまりやすくなっていると考えられます。

●末梢血液像

・好中球（NEUT）

桿状核球（STAB）と分葉核球（SEG）に分けられます。体に侵入した細菌などの異物を細胞内に取り込み、消化・殺菌します。

・リンパ球（LYMPH）

抗体の産生や、異常細胞を攻撃する、免疫反応の中心的な働きをしています。

・単球（MONO）

異物の存在をリンパ球に伝えて、抗体の産生を促します。細菌を消化分解する働きもあります。

・好酸球（EOSIN）

アレルギー反応に関係する細胞です。

・好塩基球（BASO）

アレルギー反応に関係する細胞で、顆粒を放出し即時性アレルギーを引き起こします。

●肝機能検査

・A S T（GOT）、A L T（GPT）

A S T（GOT）は心臓肝臓及び筋肉に、A L T（GPT）は肝臓に多く含まれる酵素で、急性・慢性肝炎や心筋梗塞等で高値となります。

・ALP

胆汁の流れに異常があるときに上昇します。

・ γ -GTP

肝臓や胆道に障害があると高値になります。また、アルコール常飲者は高値を示すので、アルコール性肝障害の指標となります。

●脂質検査

・（総）コレステロール

コレステロールは体に必要な脂質で食品から吸収されるとともに肝臓でも合成されます。多すぎると動脈硬化の原因となります。閉経後の女性では高くなる場合があります。

・HDL コレステロール

善玉コレステロールといわれ動脈硬化を抑制します。HDL コレステロールが低いことだけでも独立した動脈硬化の危険因子です。

・LDL コレステロール

悪玉コレステロールといわれ、動脈壁に蓄積して、動脈硬化を促進します。

・中性脂肪

摂取した過剰なエネルギーは中性脂肪として脂肪細胞に蓄えられます。高中性脂肪血症は摂取カロリー（糖質、アルコールなど）が多いこと、運動不足、肥満などを反映しており、動脈硬化の危険因子と考えられます。

・アポリポ蛋白 B

LDL の大部分を構成するアポ蛋白で、動脈硬化の発症に関与しているとされています。

- **リポプロテイン（a）**

リポ蛋白の一種で、値の高い方に脳梗塞や心筋梗塞が多いとされています。

- **リポ蛋白分画**

リポ蛋白は脂質とタンパク質の複合体の総称のことで、比重によって分類され、リポ蛋白分画と呼ばれています。当院では、アガロースゲル電気泳動法という検査方法によって、比重が高い順に、 α （HDL：高比重リポ蛋白）、 β （LDL：低比重リポ蛋白）、pre β （VLDL：超低比重リポ蛋白）に分かれます。脂質含量が多いと比重は低くなり、蛋白含量が多いと比重は高くなります。

- **危険因子・他**

- **CRP**

体内の炎症に反応して血液中に出現する微量な蛋白です。炎症がないのにこの値が高い人では、動脈硬化が進展しやすく、脳梗塞や心筋梗塞が多いとされています。

- **（血中総）ホモシステイン**

体を構成するアミノ酸の一種ですが、体質的にこの値が高い方に動脈硬化が強く、脳梗塞や心筋梗塞が多くみられます。

- **インスリン**

インスリンの基礎分泌量を測定します。血糖値が正常範囲内でインスリンの値が高い場合には、インスリンが効きにくい状態（インスリン抵抗性）を反映します。インスリン抵抗性は血圧の上昇や動脈硬化の進展に影響があるとされています。

- **糖尿・尿検査・腎機能**

- **血糖**

血液中のブドウ糖濃度です。高値を示すと糖尿病が疑われます。

- **尿糖**

血糖値が異常（180mg/dl 以上）に高くなると、尿に多量の糖が出るようになります。

- **グリコヘモグロビン（HbA1c）**

過去 1～2 か月の血糖の状態を観察することができます。

- **尿蛋白（蛋白定性）**

腎臓の病気を見つける手がかりとなります。歩行後に陽性になることがあります。

- **尿潜血（潜血反応）**

腎臓、尿管、膀胱、尿道に何らかの異常があると、尿中に少数の赤血球が混じります。

- **クレアチニン、尿素窒素**

蛋白質、アミノ酸などの燃えかすで、腎臓から排出され、腎障害があると増加します。

- **尿酸**

細胞の核に含まれるプリン体という物質の代謝産物です。肥満、胃機能低下やプリン体を多く含む食品を摂りすぎることでも高値となります。痛風の原因となります。

オプション検査の説明

●アディポネクチン（Adiponectin）

メタボリック症候群の指標として最も重要な指標の一つです。内臓脂肪が多くなると低下し、低下すると糖尿病になりやすくなることがわかってきています。メタボリック症候群の状態を表す代表的な検査項目です。

●スモールデンス LDL コレステロール（Small dense LDL cholesterol）

動脈硬化を引き起こす悪玉とされる LDL よりも、さらに動脈硬化を引き起こす作用が強いため、「超悪玉」といわれています。

●LOX-INDEX

動脈硬化の原因となる血管内皮の炎症の検査で、将来的な動脈硬化のリスクを調べることができる。

●IL-6、TNF- α

IL-6 及び TNF- α は、炎症が発生した時に数値が上昇する炎症性サイトカイン。既存オプションと組み合わせることで、動脈硬化（炎症）の発生状況をより正確に検査することができます。

※オプション検査A+はオプション検査Aを実施する場合のみ実施することができます。

●心臓ドック

胸部単純 CT 検査（冠動脈石灰化スコア）及び経胸壁心臓超音波検査にて、心臓を観察します。弁膜症や冠動脈病変が早期に発見できる可能性があります。

もの忘れドック検査内容の説明

●肥満度（BMI）

$$\text{BMI} = \text{体重 (kg)} \div \{ \text{身長 (m)} \times \text{身長 (m)} \}$$

$$\text{理想体重} = \text{身長 (m)} \times \text{身長 (m)} \times 22.0$$

の計算式で算出します。BMI が 18.6 以上 25.0 未満を標準とし、25.0 以上を肥満と判定しています。

●MR 検査（MRI / MRA）

磁気を利用した検査で、臓器や組織の形や変化を細かくみることができます。縦・横・斜めなど自由な角度で輪切りにし、コンピューターで画像を合成します。もの忘れドック検査では、脳と脳動脈の検査を行います。

●血液検査

・HDL コレステロール

善玉コレステロールといわれ動脈硬化を抑制します。運動不足や喫煙で低下します。動脈硬化の予防には HDL と LDL のバランスが重要ですが、HDL コレステロールが低いことだけでも独立した動脈硬化の危険因子です。

・LDL コレステロール

悪玉コレステロールといわれ、動脈壁に蓄積しては動脈硬化を促進します。

・中性脂肪

摂取した過剰なエネルギーは中性脂肪として脂肪細胞に蓄えられます。高中性脂肪血症は摂取カロリー（糖質、アルコールなど）が多いこと、運動不足、肥満などを反映しており、動脈硬化の危険因子と考えられます。

・血糖

血液中のブドウ糖濃度です。高値を示すと糖尿病が疑われます。初期の糖尿病は症状が現れにくく、放置しておくとう視力障害、腎障害を起こすことがあるので、早期に治療を行う必要があります。

・グリコヘモグロビン（HbA1c）

糖尿病のコントロール状態がわかる検査で、過去 1～2 か月の血糖の状態を観察することができます。

・尿酸

尿酸というのは細胞の核に含まれるプリン体という物質の代謝産物です。体質によりあるいは肥満、胃機能低下やプリン体を多く含む食品を摂りすぎることで高値となります。尿酸が増えすぎると、痛風の原因となります。